『風の谷のナウシカ』と役割語

―映像翻訳論覚書―

米 井 力 也

1　二人の「姫様」

1984 年に公開された宮崎駿のアニメーション映画『風の谷のナウシカ』のなかに、「あんたも姫様じゃろうが、わしらの姫様とだいぶちがうの」というせりふがある。主人公・風の谷の王女ナウシカに仕える「城オジ」の一人のことばである。

「腐海」と呼ばれる毒の森の侵食にさらされた人類が選ぶべき道をめぐって、軍事国家トルメキアと工房都市ペジテのあいだで「巨神兵」という最終兵器の争奪戦がくりひろげられていた。ペジテが発掘した怪物「巨神兵」を復活させ、人類を脅かす腐海の主「王蟲（おうむ）」の大群を焼き払おうというのだが、その兵器をどちらの国が保有するかで戦闘が続いていたのである。ペジテに侵攻し巨神兵を奪ったトルメキアの大型飛行船が小王国・風の谷に墜落したことから、両国の争いに巻き込まれた風の谷はトルメキア軍に占領される。

その後、人質として風の谷を離れたナウシカは、ペジテの残党との空中戦で撃墜されたトルメキアの大型輸送船からからくも脱出したのち腐海に不時着、同時に墜落したペジテの戦闘機に乗っていたペジテの王子アスベルとともに腐海の最深部に至った。そして、指導者ナウシカ不在のまま、風の谷の人々は占領軍に叛旗を翻し、トルメキアの軍隊と対峙することになった。「あんたも姫様じゃろうが、わしらの姫様とだいぶちがうの」というせりふは、この戦闘の過程でトルメキア軍の捕虜となった城オジが占領軍司令官であるトルメキアの王女クシャナにむかって言ったものである。（ギックリとゴルは城オジの名前、ジルはナウシカの父で、侵略したトルメキア兵に殺された風の谷の王。）

クシャナ	どうだ、決心はついたか。降伏を勧めに行くなら放してやるぞ。ペジテの二の舞にしたいのか。
ギックリ	あんたも姫様じゃろうが、わしらの姫様とだいぶちがうのう。
ゴル	この手を見てくだされ。ジル様と同じ病じゃ。あと半年もすれば石と同じになっちまう。じゃが、わしらの姫様はこの手を好きだと言うてくれる。働き者のきれいな手だと言うてくれましたわい。
クシャナ	腐海の毒に侵されながら、それでも腐海とともに生きるというのか。
ギックリ	あんたは火を使う。そりゃわしらもちょびっとは使うがの。

ゴル　　　　多すぎる火はなにも生みやせん。火は森を一日で灰にする。水と風は百年かけて森を育てるんじゃ。

ギックリ　　わしらは水と風の方がええ。

この会話には､腐海を焼き払おうとするトルメキアと腐海との共生をめざす風の谷の人々の姿勢のちがいがクシャナとナウシカという二人の「姫様」の対比によって示されているのだが､『風の谷のナウシカ』における言語表現の性格を端的に示している部分でもある。

２　『風の谷のナウシカ』における役割語

金水敏が提唱する「役割語」という観点から『風の谷のナウシカ』を見ると、ナウシカを中心とする登場人物がどのような役割を与えられているのかがあきらかになる。「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると､その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるときその言葉づかいを「役割語」と呼ぶ」（『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店、2003）という定義にしたがって、この作品の登場人物のせりふを分類すると、役割語としての<老人語>・<若者語>・<男性語>・<女性語>の典型的な言い回しが多用されていることがわかる。

さきに引用した城オジたちのせりふには､「わし」「わしら」という一人称代名詞､「じゃ」「のう」「わい」「くだされ」などの文末表現、そして「言うてくれる」「言うてくれました」のようなウ音便など､<老人語>がちりばめられている。このような言葉づかいは城オジだけでなく、百歳を超えると想定されている巫女的な老婆「大ババ」､風の谷の王「ジル」､ナウシカの恩師にあたる「ユパ」に共通する。これにたいしてナウシカと同世代（十代後半）と思われるアスベルは､「ぼくはペジテのアスベルだ」「ぼくらは腐海の底にいるんだよ」「君は不思議なことを考える人だなあ」という<若者語>・<男性語>を使用し、トルメキア軍の参謀クロトワは「貧乏軍人のおれですら久しくさびついてた野心がうずいてくらあ」「ケッ！ 笑ってやがるてめえなんぞ､この世の終わりまで地下で眠ってりゃよかったんだい」というように､独り言をいうときは東京下町風の言葉づかいをする｡このような役割語がキャラクターの表情や風貌とあいまって物語の雰囲気を形作っていく。

３　ナウシカとクシャナのちがい

しかし､『風の谷のナウシカ』でもっとも特徴的な役割語は、主人公ナウシカとそのライバル

ともいうべきクシャナという二人の「姫様」の言葉づかいである。斎藤美奈子は、「『ナウシカ』の二人のヒロインは、中途半端な「女らしさ」とは無縁である。二人とも知力と武力にめっぽう優れた逸材であることは、とりあえずまちがいない」「(ナウシカは) ヒロインというよりは、少女のヒーローといったほうが適切かもしれない」「『ナウシカ』では、たしかにヒロインではなく女のヒーロー、英雄の名にふさわしい女性像を出現させることに成功した。しかし、ナウシカとクシャナは、男性ヒーローの性格を女性の肉体に移植したような「英雄」だ。男のヒーローを手本にした女性像。いってみれば「男並み」の実現である」(『紅一点論』ビレッジセンター出版局、1998/ちくま文庫、2001) と述べているが、役割語の観点からみると、ナウシカとクシャナという「女のヒーロー」にははっきりとしたちがいが見られる。

クシャナは占領軍司令官として部下に命令を下すときもナウシカたち風の谷の人々に語りかけるときも一様に〈男性語〉を用いる。命令・依頼表現は「やめろ」「言わせてやれ」「参加せよ」「まちがえるな」「動くな」「焼き払え」などのように命令形を用いる点で一貫している。容姿と表情以外に〈女性性〉を感じさせる面はまったくない。二人称代名詞も「おまえ」「おまえたち」「きさま」を用いて「あなた」「あなたたち」は一度も用いることがない。

一方、ナウシカは場面に応じて〈女性語〉と〈男性語〉を使い分ける。命令・依頼表現に限定してもナウシカは普段、「急いで」「殺さないで」「やめて」のように連用形中止法を用いることが多く、命令形でも「捨てなさい」「帰りなさい」「おいで」「お帰り」「見なさい」「運びなさい」という丁寧表現が一般的である。〈女性語〉に特有の文末表現として「一年半ぶりですもの」「うまく飛べないの」「すぐ行くわ」「だめよ」も繰り返し用いられる。〈男性語〉しか用いないクシャナとは対照的なのである。

しかし、ナウシカもクシャナと同じように〈男性語〉を用いる場合がないわけではない。「普段は静かで聡明な彼女は、父のジルをトルメキア軍に殺されたと知ったとたん、熱くなって「おのれェー!!」のひと言とともに剣を抜き、みごとな剣豪ぶりを発揮して敵の兵士を次々に倒してしまうのだ。「なんてやつだよ。みんな殺しちまいやがった」と敵の参謀ならずともつぶやきたくなる (とうていヒロインらしからぬ) 行動である」(斎藤美奈子・前掲書) という場面にかぎらない。銃撃を受け墜落寸前のトルメキアの大型輸送船から、城オジのミトといっしょにガンシップとよばれる戦闘機で脱出しようとするとき、そこに姿をあらわしたクシャナに同乗を許し、敵の司令官の命を救うことになるのだが、ここでクシャナに向かっていうことばは「来い!」という命令形である。この脱出シーンではつぎのような会話が展開する。

ミト	姫様、もうだめじゃ。
ナウシカ	飛べるかもしれない。

ミト　　　　　なんですと？
ナウシカ　　　ミト、早く。
ミト　　　　　は、はい！
ナウシカ　　　エンジン始動！　砲で扉を破る！
ナウシカ　　　（クシャナに）来い！　早く！
ナウシカ　　　（クシャナに）早く中へ。ミト、行ける？
ミト　　　　　どうにか。
ナウシカ　　　発砲と同時にエンジン全開！
ミト　　　　　了解！
ナウシカ　　　用意、撃て！
ナウシカ　　　瘴気マスクをつけろ。雲下に降りてバージを救出する。

風の谷の「姫様」であるナウシカは普段、尊敬語を用いることはあまりないとはいえ、城オジたちをはじめとして村の人々と会話をかわすとき、けっしてぞんさいな言い方はしない。親しみを込めた言い回しを用いるのがふつうである。しかし、この脱出場面のように緊急事態の場合、戦闘機に同乗している城オジのミトにたいして命令形を用いることがすくなくない。(「後席、エンジンを切れ！」「エンジン音が邪魔だ。急げ」など）

ミト　　　　　腐海をきれた！　酸の湖まで３分。
ナウシカ　　　エンジン、スロー。雲の下へ降りる。
ミト　　　　　なんじゃ、この光は！
ナウシカ　　　王蟲！
ミト　　　　　腐海があふれた。風の谷に向かっている。
ナウシカ　　　なぜ、どうやって王蟲を？
ナウシカ　　　だれかが群れを呼んでる。ミト、シリウスにむかって飛べ。
ミト　　　　　は、はい！
ナウシカ　　　いる。
ナウシカ　　　ミト、照明弾！
ナウシカ　　　用意、撃て！
ミト　　　　　なんだ、あれは？
ナウシカ　　　ああっ！
ナウシカ　　　なんてひどいことを。あの子をおとりにして群れを呼び寄せてるんだ。

ミト　　　　　くそっ、たたき落としてやる。

ナウシカ　　　だめよーっ！　撃っちゃだめ。ミト、やめて！

ミト　　　　　なぜじゃ、なぜ撃たせんのじゃ。

ナウシカ　　　王蟲の子を殺したら暴走は止まらないわ。

ミト　　　　　どうすればいいんじゃ。このままでは谷は全滅だ。

ナウシカ　　　落ち着いて、ミト。王蟲の子を群れへ返すの。やってみる！

ミト　　　　　何をするんじゃ、姫様！

ナウシカ　　　ミトはみんなに知らせて。

腐海の上空を渡って危機に瀕した風の谷に向かっている途中、ペジテの兵士が王蟲の子どもをおとりにして王蟲の大群がトルメキア軍を襲撃するようにしむけていることが判明した。ここでもナウシカはミトといっしょにガンシップに乗っているのだが、戦闘モードの〈男性語〉からふだんの〈女性語〉に移行していくようすが示されているといえるだろう。ナウシカは〈男性語〉と〈女性語〉を使い分ける「女のヒーロー」にほかならない。

4　役割語としての〈男性語〉

ここで先に引用した斎藤美奈子のことばをもう一度引いてみよう。「『ナウシカ』では、たしかにヒロインではなく女のヒーロー、英雄の名にふさわしい女性像を出現させることに成功した。しかし、ナウシカとクシャナは、男性ヒーローの性格を女性の肉体に移植したような「英雄」だ。男のヒーローを手本にした女性像。いってみれば「男並み」の実現である」

じつは、この文章にはつぎのような一文が付け加えられている。「ここから悪しき男性性＝マッチョな女性像までほんの一息である。」斎藤美奈子はこれにつづいて『もののけ姫』におけるエボシ御前が統括するタタラ場という空間の分析に移っていくのだが、いまはそれには触れない。しかし、注で示されるつぎのような見解は注目に値する。

> 『もののけ姫』におけるエボシ御前のありようは、「女性にも徴兵制を」という俗流フェミニスト（ミニマリスト）の要求を想起させる。女にも男と同じ権利をすべて寄こせと要求する。アニメに置換していうと、女性キャラにも「男の子の国」のヒーロー並みの頭脳と力と武器を寄こせと要求していったら、最後はエボシのようなマッチョな姉ちゃんになるしかあるまい。（斎藤美奈子・前掲書）

ここで触れられた問題は、すでに労働現場でとりあげられているものである。たとえば、「読

売・中公　女性フォーラム２１「おんな言葉、おとこ言葉」」と題するシンポジウムの報告の中に「女性の職場言葉　「均等法」経て変化」と題する記事がある。

> おんな言葉、おとこ言葉は、それぞれ「やさしく家族を支える女性」「外で丁々発止と戦う男性」に対応している面がある。さまざまな職域に進出しつつある女性にとって、「女性であること」と「職業人であること」を言葉の上で折り合わせるのは、むずかしい課題だ。
>
> 読売新聞が０２年から断続的に掲載している企画「新日本語の現場」取材班も、働く女性の多くの試行錯誤例に出合ってきた。
>
> 東京都内の清掃会社では、４０代の女性マネジャーが、「確認しろ」「相手によって態度を変えんじゃねえ」と、字面にすると男としか思えない言葉を連発していた。これが案外、部下に評判がいい。「わかりやすくて助かる」「本気で向上させようとしてくれている」と受け止められていたようだ。
>
> 自衛隊では、地方の後方支援隊輸送隊長を務める３０代の女性三等陸佐が、男性の部下たちに「２時に来い」「輸送せよ」などと指示を出していた。初任地では、父親と同年配の男性部下になんと命令していいか分からず、「〜してください」口調だったのが、当の部下に「『やれ』と言ってください」と意見され、改めたのだという。
>
> ただ、こうした例が目立つのはやはり男女雇用機会均等法施行後に就職した世代。それ以前の、現在５０代で部下を持つベテラン女性たちには「悪いけど〜してほしいの」「いま、時間ある？」「これ、明日までにお願いね」といったソフト路線派が多い。「男性は女性上司の命令を受け慣れていない。母親的なアプローチの方が抵抗がなく効果的」という経験的戦略だ。
>
> 母親的トーンで円滑な上下関係を築くか、仕事上の役割には「男女関係なし」と割り切るか。女性の「職場言葉」も変化しつつある。（「新日本語の現場」取材班）（2005.04.05　読売新聞・東京朝刊）

心優しい「姫様」と勇猛果敢な戦士の両面を兼ね備えたナウシカの「役割語」は『風の谷のナウシカ』を特徴づけるものであるが、上映後 20 年を経たいま、すでに物語のなかだけの問題ではなくなっているのである。

［付記］2005 年度から留学生を含む学部学生・大学院生といっしょに「映像翻訳論」というテーマで宮崎駿のアニメーションを対象にして字幕と吹替版の分析をはじめた。これは科学研究費助成金・萌芽研究「映像翻訳論：日本映画とアニメにおける字幕・吹替版の翻訳研究」の一環と

しておこなっているものである。現在のところ、『風の谷のナウシカ』の日本語シナリオ・英語版・韓国語版・中国語版の対照表を作成しながら、翻訳の上でどのような問題がみられるかという議論をしている段階だが､本稿で述べた役割語の問題も翻訳研究としてとりあげるべきものと考える。本稿の副題に「映像翻訳論覚書」と記したのはそのためである。翻訳研究に取り組むとき、翻訳にあらわれた差異が二つの言語の差異に基づくのはいうまでもないが、もともとのテクストがもっている言語的特性を見据えた上で比較しなければ､すべてを言語の差や｢国民性｣｢民族性」に還元するという安直な結論に堕してしまう危険性があるということを肝に銘じながら、議論を続けていきたいと思う。

（『日本語講座年報』第 3 号、pp.3-6、大阪外国語大学日本語講座、2005 年 12 月）